長野県埋蔵文化財センター速報展「長野県の遺跡発掘　2011」

遺 跡 調 査 報 告 会

平成 23 年 7 月 10 日（日）

調査報告会

13：00　　受　付
13：30　　開　会

あいさつ　　長野県伊那文化会館　　館　　長　斎藤秀夫

報告１　縄文大集落と土偶ー中野市千田遺跡ー
主任調査研究員　綿田弘実‥‥１

報告２　弥生から古墳のいのりー佐久市北裏遺跡群ー
調査研究員　谷　和隆‥‥５

休憩

報告３　中世の街道と門前集落ー千曲市東條遺跡ー
主任調査研究員　町田勝則‥‥９

遺跡トーク

15：30　　閉　会

会　場　：　長野県伊那文化会館　小ホール

縄文時代大集落と土偶

―中野市　千田遺跡―

所在地及び交通案内：中野市大字豊津字千田
上信越自動車道信州中野 IC より北へ 4km。
JR 飯山線替佐駅より南東へ直線距離 0.3km。
調査の原因：千曲川替佐築堤関連事業。2002・2003・2005～2007 年度発掘調査。
遺跡の立地：千曲川左岸、標高 330m前後の地点。ＪＲ飯山線替佐駅付近から南は千曲川、東は斑尾川までの緩斜面に広く展開。
遺跡の特徴：縄文時代から弥生・古墳・平安時代、中・近世まで続く集落の遺跡。一部中近世の畑・水田跡。
発見された主な遺構（縄文時代）：竪穴住居跡54 軒、屋外埋設土器2 基、土坑約 1,000 基、配石遺構、溝跡、遺物集中、焼土跡。
発見された主な遺物（縄文時代）：〔土器〕縄文前期・中期（多量）・後期、〔石器〕石鏃、スクレーパー、石錐、磨製石斧、打製石斧、磨石・凹石類、石皿、〔土製品〕土偶 200 点以上、ミニチュア土器、耳飾り、垂飾り、〔石製品〕石棒、翡翠・滑石製垂飾り、三角柱状石製品。

１　川べりに広がる縄文集落

千田遺跡では、千曲川沿岸約 500m に及ぶ全調査地点と、斑尾川沿岸の一部に、縄文時代前期・中期・後期にわたる生活跡が広がっています。斑尾川から最も離れた、千曲川の上流側に位置する平成 14 年度調査地点（１～５区）では、川沿いの斜面から中期終末から後期前半のゴミ捨て場と墓がみつかりました。沢をへだてて東側に位置す

千曲川上空から空撮した千田遺跡８区

る、替佐駅南側の 17 年度調査地点（８区）は、竪穴住居跡 53 軒がみつかった中期中ころ前後の、北信地方最大級の集落跡です。斑尾川に沿った JR 線に近い 18 年度調査地点（12 区）では、中期前半の竪穴住居跡１軒がみつかりました。

縄文時代の人々は、数千年にわたり時期によって生活地点を変えながら、広大な遺跡を残していった様子が明らかになってきました。

２　信濃と越後の縄文文化をつなぐムラ

８区の集落跡では、壁際を一段高く掘り残したベッド状遺構を備えた竪穴住居が多くみられ、長野県では初めての例となる、長大なコの字形石囲炉をもつ住居が含まれていたことから、新潟県の地域色が強くうかがわれました。整理作業が進んで多量の縄文土器の内容が明らかになり、さらに新潟県のお国ぶりの強さが見えてきました。

コの字形石囲炉をもつ２軒の竪穴住居跡

縄文土器の形態は、丈の高い深鉢形と呼ばれる煮炊き・貯蔵具が圧倒的多数を占めています。台がついた鉢、盛りつけ用の浅鉢、醸造具とも太鼓ともいわれる有孔鍔付土器、祭祀用のミニチュア土器など、少数の器種も見られます。中期後半の深鉢形には、複雑な形の把手や粘土をはり付けた渦巻文など、飾りの多い小形品と、水平な縁の下に粘土紐が１周するか、縄文だけつけた簡素な大形品があります。装飾的な深鉢は新潟県に広く分布するタイプであり、簡素な深鉢とセットで用いる特徴は、新潟県でも上越地方と共通しています。

３　火焔型土器をもつ交流拠点

新潟県を中心に分布する火焔型土器は、全国の縄文土器の代表格です。千田遺跡出土土器の中から、火焔型土器が複数個体確認されました。長野県内では５遺跡目となりますが、複数個体出土した遺跡はありません。展示した資料は白色の焼き色で、長岡市周辺の土器と共通しています。これとともに県内では初めて王冠型土器がみつかりました。十日町市・長岡市などがある中越地方からもたらされたと推定されます。

１軒の住居跡から出土した装飾的な小形深鉢（左）と簡素な大形深鉢（右）

また、祭祀の場でランプとして用いたと考えられている釣手土器が５点ほど出土しています。釣手土器は山梨県から長野県中南信地方に多く、現在分布の北限に当たります。このような土器の集まり方から、千曲川に面して立地する交流拠点という遺跡の特徴が推定されます。

４　多数の土偶

土偶は８区の縄文時代中期集落跡から 200 点近くが出土しました。１～５区・12 区出土資料を合わせると、200 点を上回っています。このなかには、小破片や磨滅のため土偶かどうか不確かなものも含まれ、接合する可能性もありますので、点数の確定は今後の作業で行います。

土偶の状態は、頭部、腕、胴部、脚部などバラバラになった全身の一部分か、逆に胴部から脚部があっても頭部を欠くなど、全身がそろっているものはほとんどみられません。出土した場所は、竪穴住居跡に埋まった土の中や、とくに遺構が見当たらず土器や石器が出土する地点などです。

８区から約 150m離れた 12 区では、１軒だけの住居跡とほんのわずかな遺物が出土したに過ぎず、縄文時代にはムラはずれのような場所と推定されます。この地点から土偶が７点も出土しました。土偶の墓場を思わせるような、注目される出土状況です。

千田遺跡の縄文中期の土偶は、板状土偶と呼ばれる、平板な胴体に短い脚部

縄文時代中期の土偶

を付けるタイプで、新潟県から北陸地方の土偶と共通しています。頭頂部は平らかくぼませ、目鼻など顔面を表現したものと、それがないものとがあります。

長野県では、360 点以上を出土した松本市エリ穴遺跡の縄文時代後・晩期の事例が１遺跡最多出土といわれています。千田遺跡の土偶はそれに次ぐ数であり、縄文中期に限れば最多数と思われます。

＜まとめ＞

① 縄文時代中期全般を通じて新潟・北陸地方の特徴が強い土器を用いながら、地域的な特徴も見いだせる。

② 長野県では希少な火焔型土器・王冠型土器が複数個体伝わっていた。

③ 縄文土器の変化について見通しが立ち、集落変遷解明の手がかりができた。

④ 県内屈指の多数の土偶を用いていたことが明らかになった。

＜課題＞

① 土器の細かな変化を時間軸として、集落の移り変わりを跡付ける。

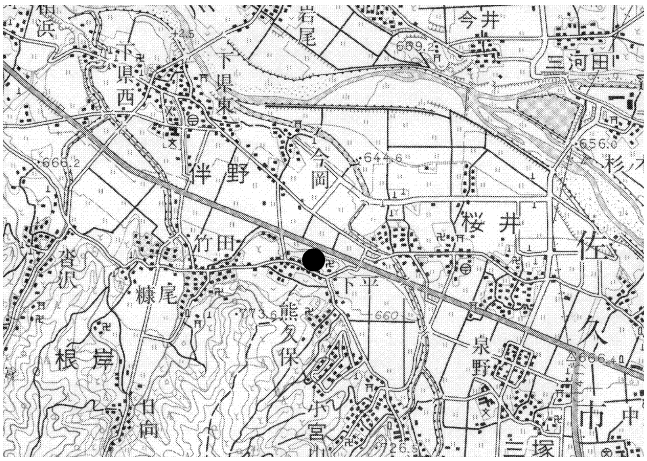
② 時期・地点ごとの土地利用やムラの移り変わりを明らかにする。

③ 生活道具（石器）と獣骨等から千曲川本流に面した集落の生業を復元する。

④ 集落・遺構・遺物全般から千田遺跡及び周辺地域の特色を明らかにする。

弥生から古墳のいのり

―佐久市　北裏（きたうら）遺跡群―



所在地及び交通案内：佐久市伴野北裏ほか。
中部横断自動車道佐久南ICから南西約0.2㎞。

調査の原因：中部横断自動車道建設に伴う発掘調査。

遺跡の立地：千曲川及び千曲川に注ぐ片貝川左岸の低地から段丘上にかけて立地する。今年度の調査は段丘上（標高660～670m前後）にあたる。

遺跡の特徴：弥生時代の集落跡及び墓跡群、古代・中世の集落跡。

発見された主な遺構：弥生時代の竪穴住居跡（たてあなじゅうきょあと）24軒、礫床木棺墓（れきしょうもっかんぼ）2基、方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）8基、円形周溝墓（えんけいしゅうこうぼ）1基、木棺墓1基、遺物集中4基、平安時代の竪穴住居跡14軒、中世の竪穴建物跡4軒、土坑600～700基など。

発見された主な遺物：弥生時代（土器、石器）、平安時代（土師器（はじき）、須恵器（すえき）、内黒土器（うちぐろどき）、灰釉陶器（かいゆうとうき））、中世（陶磁器、内耳鍋（ないじなべ））など。

1　佐久平南縁の台地上下に広がる複合遺跡

調査区は遺跡を北北東－南南西方向に約500mの長さで横断しています。北から1～5の調査区を設定しました。発掘調査は平成19年度に1区（低地部）、平成21年度に2区（低地部）で実施しています。縄文土器や弥生土器が散布していたものの遺構はありませんでした。

今年度は段丘上の3～5区の約300m区間に着手し、3区と5区の発掘調査が終了しました。その結果、縄文時代から近世に至る遺構・遺物が多数検出されました。4区の本格的な調査は次年度以降に行う予定です。

2　弥生時代後期のムラ

3区から弥生時代後期の竪穴住居跡25軒が検出されました。遺構検出面が地表から30～50cmと浅く、耕作により消滅したものがあるため、実際にはより多くの竪穴住居跡が存在したと考えられます。

竪穴住居跡群は段丘崖際から50m程度の範囲に分布しており、調査区外にも大きく広がることが予想されます。竪穴住居跡からは、炉や柱の跡と共に多くの弥生土器がみつかっています。

３　弥生文化の墓

弥生時代中期～古墳時代前期の複数種類の墓跡が発見されました。墓の分布は弥生時代後期の竪穴住居跡群とほぼ重なっています。

礫床木棺墓　2 基の礫床木棺墓が近接して検出されました。礫床木棺墓はピンポン玉大の丸い河原石を木製の棺の底に敷き詰めた墓で、弥生時代中期と考えられます。残念ながら棺の底の部分まで耕作で壊されていました。

方形周溝墓　方形の範囲を溝で囲み、その中に盛土をして遺体を葬る方形周溝墓が 8 基みつかりました。これらは、溝が途切れる部分（開口部）により３つの形態に分けられます。

１つめは四角の 4 隅 4 か所が途切れる形態です。１辺が 8～10ｍの規模で、弥生時代後期の集落が営まれる前に造られたと考えられます。

２つめと３つめは四角の南辺中央が途切れる形態です。１辺が 15～20ｍの規模で、周溝から出土した土器から古墳時代前期と位置付けられます。弥生時代後期の集落での営みが終わった後に造られたことになります。古墳のような大きな規模がありますが、石室はなく弥生時代の方形周溝墓の構造をしています。古墳時代まで残った弥生文化の墓と位置付けられます。この方形周溝墓の西およそ 300ｍには竹田峯（たけだみね）遺跡の発掘調査地点があり、同じタイプの方形周溝墓がみつかっています。そこまでは同じ地形が連なっているので、今回の調査地点と竹田峯遺跡の調査地点の間に未発見の方形周溝墓がたくさんある可能性が出てきました。

木棺墓　方形周溝墓群から約 200m 南の山裾から弥生時代後期の木棺墓が 1 基検出されました。東西を長軸とする長さ 150cm、幅 55cm の木製の棺跡が確認でき、一部が炭化して残っていました。棺の内側には焼土のブロックと、完形の甕、壺、台付壺、高杯、鉢の合計 10 点の弥生土器が落ち込んでいました。棺の上にあったものが流れ込んだと考えられます。また、死者の装身具と考えられるガラス小玉 1 点も出土しています。

礫床木棺墓の調査

方形周溝墓

木棺墓の周辺 4 か所から弥生土器がまとめて置かれた跡がみつかりました。壺や鉢等の赤く塗られた小型を中心とする完形土器が並べられていました。木棺墓に葬（ほうむ）られた人物に関連する儀式がおこなわれていたと考えられます。

木棺墓

４　弥生文化のムラと有力者の墓

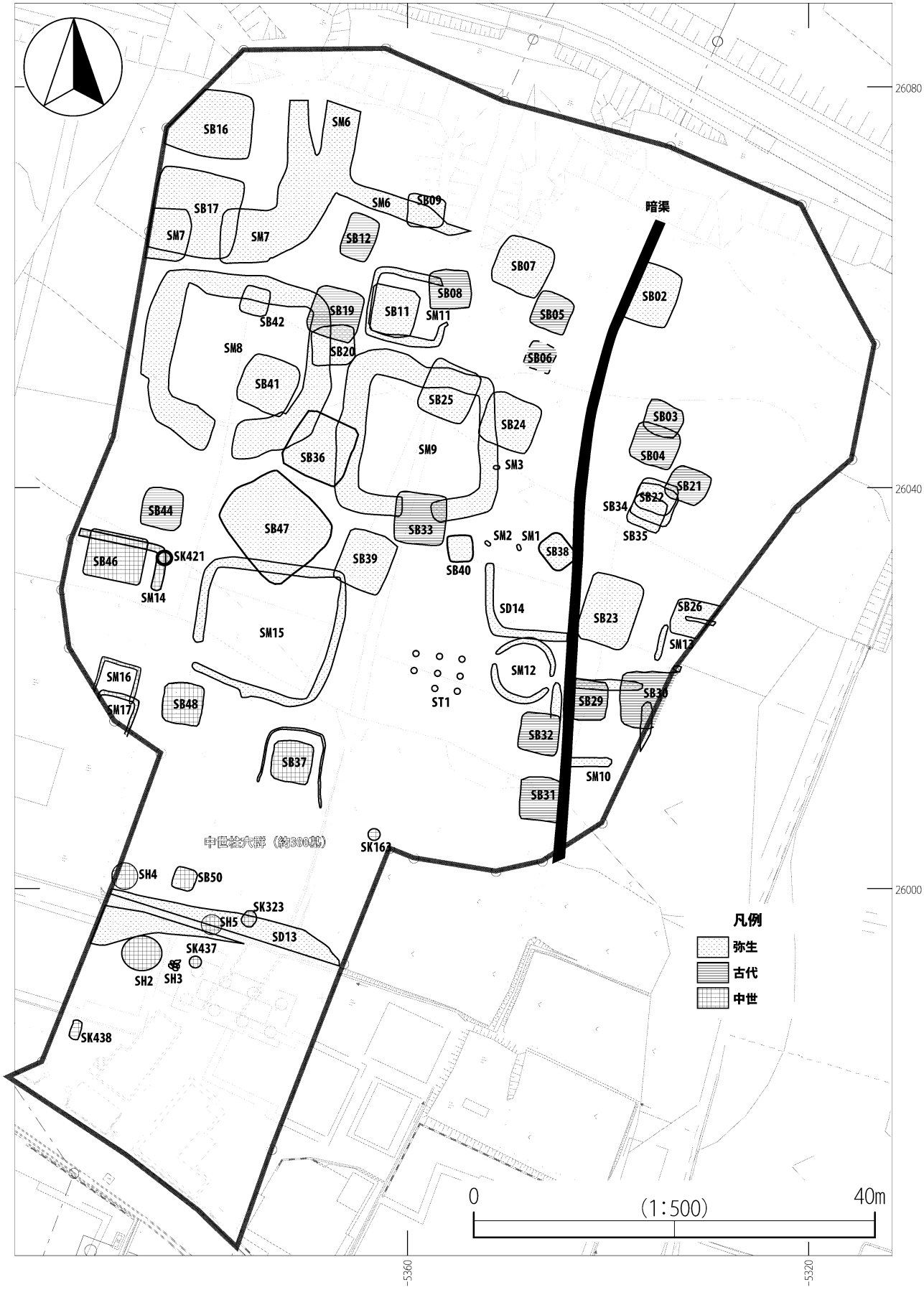
弥生時代中期から古墳時代前期の間に、北裏遺跡群周辺はムラや墓が繰り返しつくられる場所であることがわかってきました。しかし、ムラで暮らした人びとすべてが、葬られるには墓の数は少なすぎます。また、特別な土器が供えられていることから、墓に葬られた人はムラの有力者だったと考えられます。特に大規模な方形周溝墓群を造るには多大な労力が必要となるため葬られた人たちの力の大きさを想像することができます。また、墓を造った人びとが暮らしたムラには、その労力を支えるだけの生産力があったはずです。北裏遺跡群は佐久平、千曲川左岸一帯の拠点となるような有力なムラであった可能性が考えられます。

＜まとめ・成果＞

① 弥生時代後期の大規模集落が確認された。
② 弥生時代中期から古墳時代前期の複数種類の墓跡群が確認された。
③ 集落や墓跡群の状況から佐久平、千曲川左岸一帯の拠点となるような有力なムラが存在していた可能性が考えられる。

＜課　題＞

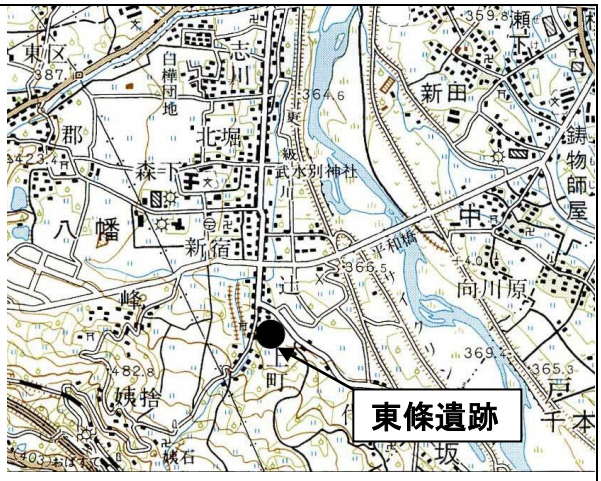
・ 集落や墓跡群の広がりと水田などの生産域の場所を把握し、ムラ全体の構造を明らかにすること。



北裏遺跡群 3 区遺構配置図

中世の街道と門前の集落

―千曲市　東條遺跡―



所在地及び交通案内：千曲市八幡東條。JR 篠ノ井線姨捨駅下車、千曲市営バス斎ノ森神社前バス停下車　徒歩１分。更埴 IC より上田方面。平和橋を渡り「辻」交差点を左折、市道を姨捨駅方面へ。現在は坂城更埴バイパス線が完成し、斎ノ森神社前で交差する。その場所が遺跡地。

調査の原因：国道 18 号線坂城・更埴バイパス改築に伴う発掘調査。

遺跡の立地：姨捨土石流堆積物により形成された台地の末端部に位置し、遺跡の東端は千曲川左岸の後背湿地に隣接する。

遺跡の特徴：古墳時代末～平安時代中期、鎌倉時代～室町時代の集落遺跡

発見された主な遺構：古墳～平安時代の竪穴住居跡82 軒・掘立柱建物跡33 棟ほか、鎌倉～室町時代の掘立柱や礎石建物跡12 棟、井戸跡 18 基など。

発見された主な遺物：土師器、須恵器、陶磁器、木製品（木簡・漆器・曲物・下駄、柱材など）、銭貨、石製品（硯・石臼など）

調査の様子：平成 14 年度より発掘調査が開始され、古墳時代の終わりころから平安安時代の中ごろにかけての集落跡が発見されました。17～19 年度調査でも平安時代の住居跡と鎌倉や室町時代の井戸跡や小さな柱穴が調査され、木製品（漆器・曲物など）や銭が多数出土しました。

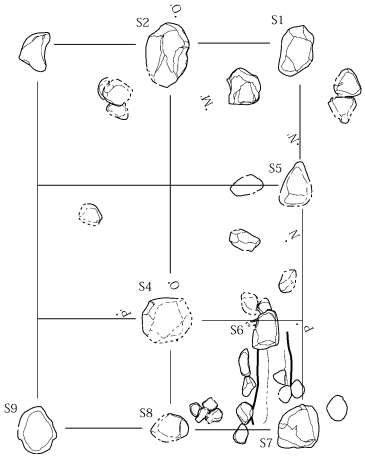
１　遺跡の立地

東條遺跡は「田毎の月」で知られる「姨捨の棚田」のすぐ真下にあります。三峯山(1131.3m)起源の土石流堆積物の上に遺跡は形成され、地山にはたくさんの小礫が含まれています。今回報告する鎌倉時代から室町時代を中心とする中世の集落跡（約 700 年～600 年前）は、この堆積物が小高く盛り上がった更級川沿いの好適地にあります。

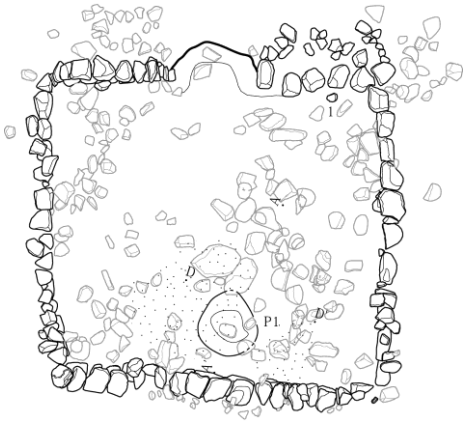
２　発掘された建物跡

発掘された集落跡は、建物跡と井戸跡、溝跡から構成されています。建物跡には、地面に柱穴を掘って作る掘立柱建物、平たい石を置いて柱を立てる礎石建物、地面を方形状に掘りくぼめ、壁ぎわに石を積み上げて基礎をこしらえた

方形竪穴状建物（ほうけいたてあなじょうたてもの）などがあります。掘立柱や礎石立の建物跡は主に居住や仕事場など、生活のための施設と考えられています。方形竪穴状の建物は、鎌倉時代以降に登場してくる特殊な施設で、生活の場だけではなく貯蔵施設や倉庫など、多目的な使い方が想定されています。



礎石建物跡（左は発掘時の写真・右は調査中に作成した図面）



方形竪穴状建物跡（左は発掘時の写真・右は調査中に作成した図面）

３ 発掘された井戸跡

建物跡の周囲では、井戸跡も発掘されました。井戸のつくりには、いくつかの種類があるようですが、主体となるのは石を組んで作られたものです。井戸の底に大きな曲物をすえつけたり、板材を井桁（いげた）に組んだ例もあります。遺跡周辺の地下水位が高いためか、深さは 2m ほどの例が多いようです。

石組のある井戸跡

４　日常生活の道具

遺跡からは、人々の生活を映しだす日用品が数多く出土しました。土師質の皿、下駄や櫛、曲物さらには漆塗りの椀や皿、硯や銭などがあります。ことに漆器では、赤漆を用いて「鶴」や「菊花」、「松」や「秋草」などの模様を描いており、硯は縁に線刻模様が彫りつけてあります。食器の中には、中国の南宋からもたらされた青磁や白磁もあります。これらはいずれも商人の手により中世の都市（京都や鎌倉）から運ばれてきたと考えられます。

「鶴」の模様のある椀（発掘時の写真）

５　まじないの道具

日常生活の道具とともに、呪術的な品も発見されました。注目される資料とし「蘇民将来符」木簡と「笹塔婆」があります。

「蘇民将来符」木簡

木簡は長さ 22.7cm、幅 2.8 cm、厚さ 0.1 cm で、頭部直下の左右に切り込みが入っています。

表面に「蘇民将来子孫人（家）□」

裏面にセーマンと呼ばれる「星」

厄よけのまじないのお札として使われたものと考えられます。

「蘇民将来符」木簡の赤外線写真ほか）

「笹塔婆」

欠損した資料です。長さ 14.6cm、幅 2.5 cm、厚さ 1.0cm で、頭部には二条線と呼ばれる沈線が彫り込まれています。

表面に「梵字（ばん）　迷故三界～」　　裏面に「南無」

６　武水別神社の門前に開けた中世集落

東條遺跡は、武水別神社へと通じる道沿いに発達した集落遺跡です。その道は松本より麻績を抜け、一本松峠をへて八幡まで通じる道で、中世の鎌倉時代（約 800 年前）に整備が進んだ古道「一本松街道」と推定されています。また

道沿いには「八日市場（ようかいちば）」と呼ばれる古地名が残り、近代以前に発達した市場の存在が予想されます。さらに「斎ノ森（さいのもり）」の地籍があり、更級川をへだてて、「外西川原」や「内西川原」などの地名も見られます。「斎」は「塞（さい）」とも考えられ、境界を表わすとの説もあります。このように遺跡の周辺には、現在もなお、中世の門前集落跡を考える上に、重要なヒントとなる歴史的な要素が多く存在しています。出土遺物から推定される集落跡の年代は、鎌倉時代後期から室町時代中期ころ（およそ 13 世紀後半から 15 世紀）です。

商人や参拝者が往来し、文物がふんだんにもたらされ、銭によって売り買いがなされる。古代社会には見たことのない民衆のエネルギッシュな生活の一端が、この八幡の地にも見られるようになった。そんな歴史を事実として証明してくれると思われるのが、東條遺跡です。

まとめ

- 中世の東條遺跡は、武水別神社の門前に開けた集落である。集落は、松本よりいたる街道沿いに発達し、市場的な役割を担った可能性がある。
- 建物跡や井戸跡などから、人々が常時生活を営み、往来する旅人を相手に、商品の売り買いを行い、あるいは棚店を開く場所を提供するような集落であった可能性が高い。